

令和6年度法人化に関する勉強会を開催

当部門は、水戸市及び茨城町で法人化志向のある若手農業者8名を対象に、「法人化に関する勉強会」を開催しました。7月24日の第1回講座は、有限会社照沼農園の照沼氏、8月22日の第2回講座は株式会社AOKI FARMの青木氏より法人化のメリット・デメリット等の事例紹介をしていただきました。

照沼氏からは、高品質な農産物生産を目指し法人化した経緯の他、法人化により詳細に収支状況を把握できるようになり、コスト管理をしっかりと行うことで従業員への業務指示の根拠が明確となったこと、週ごとに会計を把握することで早急に経費を調整できるようになったこと等、具体的な話を聞くことができました。

青木氏からは、経営の安定や従業員の育成及び労働環境を整備するために法人化したこと、法人化により信頼性が増して農地の集積が進んだこと、就業規則を定めたことで作業を計画的に進めることができ、収量や品質、売上げの向上に繋がったこと等、法人化のメリットを聞くことができました。

受講者からは、「法人化の前に税理士を雇って収支状況の把握から始めたい」「誰もが作業内容を分かるように改善したい」等の感想が挙げられました。

当部門では、今後も農業者の経営改善に向けた法人化について継続支援をしていきます。



法人化勉強会の様子

第13回「全国ねぎサミット2024inみと」が開催されました

11月30日、12月1日の2日間にわたり、水戸市民会館、水戸芸術館通りを会場に、全国23のねぎ産地(県内参加:水戸の柔甘ねぎ(JA水戸水戸地区ねぎ生産部会)、奥久慈ねぎ、坂東ねぎ)が参加し、開催されました。2日間で15,000人の来場者数があり、大盛況でした。

「ねぎサミット」は、全国各地で生産されている魅力あるねぎのPRや消費拡大を図るとともに、安全・安心な国産野菜を全国に発信し、農業経営の安定に資することを目的に全国各地で開催されています。各産地が出展しているブースではそれぞれの産地のブランドねぎが販売され、また伝統的なねぎ料理などが提供されていました。「水戸の柔甘ねぎ」のブースでは、柔甘ねぎの販売とねぎの皮むき体験が行われ、中学生以下を対象とした皮むき体験は、小さな子供達に好評でした。

また、ねぎ生産部会の自主企画による「生産者向けセミナー」には、県外産地29名を含む、計56名が参加しました。県農業総合センター園芸研究所病虫研究室の研究員を講師に、高温期に多発する腐敗性障害対策やネギハモグリバエの別系統など主要害虫の防除に関する講演が行われました。質疑応答では、腐敗性障害対策に関する県外他産地の取組事例の報告があり、活発な意見交換が行われました。



ねぎサミットの様子

関東ブロック農村青少年(4H)クラブプロジェクト実績発表会 「意見発表の部」に県代表として出場!

10月29日に栃木県青年会館において、「令和6年度関東ブロック農村青少年(4H)クラブプロジェクト実績発表会」が開催されました。本発表会は、関東ブロックの青年農業者が一堂に会し、プロジェクト活動の成果やグループ活動に係る意見の発表を通じて研鑽を積み、会員の農業技術や経営能力の向上を図るとともに、組織活動の一層の活性化を図ることを目的として、毎年開催されています。

意見発表の部において、水戸市の園部潤一氏が県代表として出場し、「人財を活かした新たな農業経営の創出-持続可能な農業をめざして-」のタイトルで、今後の農業経営について発表しました。園部氏は、他産業を経て就農7年目で、慣れない農作業や台風、洪水などの気象災害に苦勞しながらも、周囲の励ましもあり、前向きに農業に取り組み、将来的には法人化して、地域農業を担っていきたいという経験に基づいた力強い発表を行いました。審査員からは「思いがけないアクセントの話や、心がくじけそうになったこと等が率直に語られ、苦勞や努力が伝わり、共感できるとてもよい内容だった」等の感想が寄せられ、高い評価を受けました。



意見発表を行う園部氏

「6次化大賞」グランプリ、「いばらき農の6次化商品コンテスト」特別賞受賞!!

ひたちなか市でほしいもとかんしょ加工品の製造販売を行う株式会社住谷公商店(代表取締役住谷まさ美氏)が、新潟県で開催された「6次化大賞」でグランプリ、本県主催の「令和6年度いばらき農の6次化商品コンテスト」で特別賞を受賞しました。

「6次化大賞」は、6次化に取り組む事業者を対象に優れた商品を顕彰することを目的としており、同社メイン商品の「焼き芋スナックPAKIPOKI」が受賞しました。

「令和6年度いばらき農の6次化商品コンテスト」では、ほしいもとし梅を合わせた「ブラムッチーモ」とお酒に合う「ブラックペッパーパキポキTSUMAMI BAR」の2商品が特別賞を受賞しました。

同社は、焼き芋の皮まで活用したお菓子や消費者ニーズに応えるためにほしいも以外の加工品開発に積極的に取り組んでおり、今後の新商品が期待されます。



受賞した住谷氏

「第28回茨城県施設野菜立毛品評会」 トマトの部で最優秀賞を受賞!!

「第28回茨城県施設野菜立毛品評会」トマトの部で、塙正樹氏(茨城町)が最優秀賞(特別賞:農林水産省農産局長賞・株サカタのタネ社長賞)を受賞しました。

今回、品評会に出品された15点の圃場において立毛審査と品質審査が行われた中、塙氏の圃場は、こまめな管理作業による適正な樹勢管理と、近年県内で問題となっている黄化葉巻病への耕種対策等により、病害虫の発生が少ないことが評価されました。塙氏のトマト栽培は、促成、夏秋抑制作型を組み合わせた周年栽培で、生協への契約出荷や近隣の直売所に出荷しています。また、環境制御装置の活用や、定期的な栄養診断に基づいた施肥を行い、長期促成栽培の収量向上に取り組んでおり、更なる活躍が期待されます。



最優秀賞を受賞した塙氏

水戸地域就農支援協議会 担い手確保・育成担当者研修会

水戸地域就農支援協議会は、11月14日に石岡市にある朝日里山学校で研修会を開催し、18名が参加しました。当協議会は、市町村農業関係課、農業委員会、JA、県央農林事務所経営・普及部門(以下当部門)及び就農支援アドバイザーを構成員として、地域農業の担い手の確保・育成を推進するために設立されています。今回は、今後の新規就農者に対する支援体制を強化するため、関係機関が連携した就農準備資金の活用による新規就農者支援体制事例を学ぶことを目的で開催しました。

NPO法人アグリやすと、石岡市及びJAやすとより、朝日里山ファーム、ゆめファームやすと及びやすと菜苑(株)の関係機関が連携した新規就農者支援体制について、研修機関設置の経緯や支援内容、有機野菜の販売、今後の課題等の説明を頂きました。また、有機農業者の就農事例として、石岡市の福田農業経営士より「関係機関の支援で良かった点、改善点について」と題して、朝日里山ファームを研修先にした経緯や、その後のフォローも含めた対応等についてお話しいただきました。出席者からは、今後の受入品目や他の研修機関との違いの他、有機農業等について多数の質問が出され、活発な意見交換が行われました。

当部門では、今回の新規就農者支援体制事例から学んだことを活かし、今後も関係機関と連携して、地域農業の担い手の確保・育成に取り組んでいきます。



研修会の様子

いばらきみどり認定について

「いばらきみどり認定」は、県内で環境負荷低減に取り組む5年間の事業計画を作成し知事の認定を受けることができる制度で、みどり投資促進税制や資金貸付の優遇措置等のメリットを活用することができます。個人だけでなく、グループ(団体)としても認定を受けることができます。



↑詳細はこちら

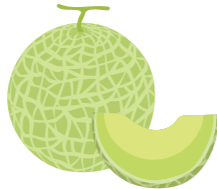
ハウスにおける抑制アールスメロンの高温対策

近年、夏季の高温による農作物の生育不良が問題となっています。農業用ハウスは、保温や暖房、光の透過を目的に作られているため、温度が下がりにくい特徴があります。ハウスの温度を下げる方法は様々ですが、それぞれにメリット・デメリットがあり、目的や経済性を考慮して対応する必要があります。

高温対策の1つに塗布剤をハウス外側に塗布する方法がありますが、近年は、従来の「遮光」に加えて「遮熱」効果のある塗布剤が販売されています。

夏季にハウス内で栽培する抑制アールスメロン栽培では、生育～収穫期が夏季の高温期にあたるため、果実内発芽や葉の黄化症などが発生するといわれています。そこで、遮熱塗布剤をハウス外側に塗布することで、ハウス内温度の上昇抑制にどの程度効果があるか測定しました。7月上旬塗布のハウスにおいて、7月中旬から下旬にかけて測定した結果、晴天日で約2℃の温度低下が見られました(図)。一方、曇雨天日及び夜間の気温差はほとんどありませんでした。また、生育～交配期の生育に大きな差は見られませんでした。

遮熱塗布剤の使用は、作業環境改善の効果も期待されますが、降雨や日数の経過等による流亡で、昇温抑制効果が低下する可能性もあるため、適切な塗布時期や効果の持続性等、更なる検証が必要です。



測定パイプハウス:幅5.4m×長さ50m(写真左:塗布あり、右:無処理)

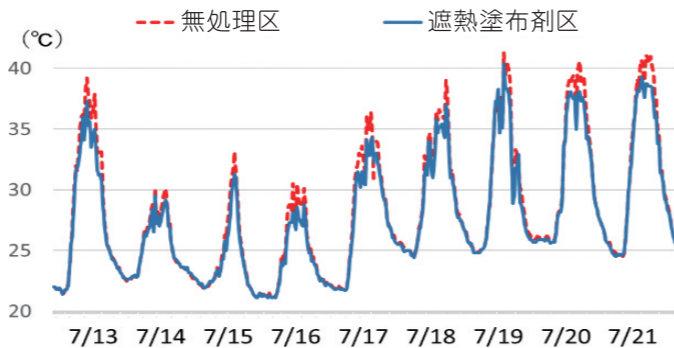


図 遮熱塗布剤によるハウス内温度上昇抑制効果(測定位置:畝上35cm)

ハウスねぎの高温対策

JA水戸水戸地区ねぎ生産部会が生産する地理的表示(GI)保護制度に登録された「水戸の柔甘(やわらか)ねぎ」はハウス栽培による軟白ねぎです。ハウスねぎは、作型によって夏季の高温期を経過することから、高温の影響による生育不良や停滞などの影響が生じています。そこで、遮光・遮熱シートを用いた昇温抑制効果や生育に及ぼす影響について検証しました。

遮光・遮熱シートの利用方法と使用時期

遮光・遮熱シートは、パイプハウスの屋根部分に被覆し、6月下旬及び7月中旬定植の作型で7月下旬から9月末までの期間使用しました。また、ハウス内の温度や照度等について、遮光・遮熱シートを被覆しない場合(以下、被覆なし)と比較調査しました。

昇温抑制効果と生育に及ぼす影響

遮光・遮熱シートを被覆したハウスは、気温が上昇する時間帯(午前10時から午後4時)において、被覆なしと比較して、2～6℃程度の昇温抑制効果が認められました(図)。また、ねぎの光飽和点※は25klxであり、これに半日程度(3～4時間)遭遇する必要があります。この遮光・遮熱シートの遮光率は30%程度であり、光飽和点25klxを超える時間は、晴天日で8時間、曇雨天日で6時間、雨天日で5時間程度ありました。遮光・遮熱シートを被覆したハウスでは、生育遅延も光線不足による徒長も認められず、計画的な収穫・出荷が見込まれます。

一方、被覆なしのハウスでは温度の上昇しやすい中央部付近で高温の影響と思われる生育遅延が認められ、収穫遅れや収量減につながる懸念されました。

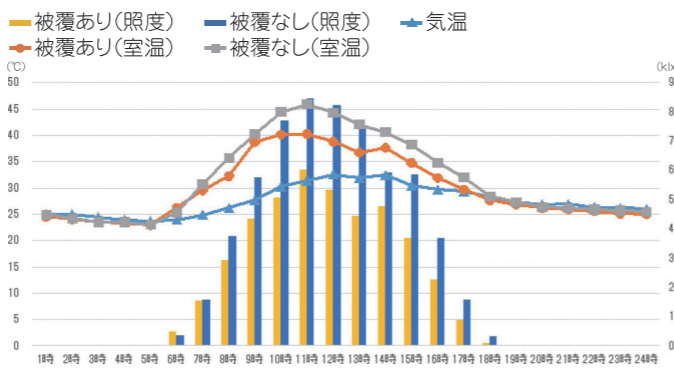


図 遮光・遮熱シート効果(9月、晴、最高気温33.4℃、最低気温23.5℃)

※光飽和点…植物の光合成において、光の強度が上がると光合成速度が速くなるが、ある強度以上では飽和状態に達し、それ以上速くはならない。その光の強度のこと。

令和6年産水稲の振り返り

田植えから出穂期(5～7月)までの気象は、平年と比べ平均気温は高く、日照時間は多く推移し、出穂期は平年と比べ7～8日早くなりました。登熟期間(8～9月)の気象は、平均気温は平年と比べ1.3℃高くなりましたが、日照時間は平年並、登熟期間も平年並でした。

生育は、平年に比べ草丈は長め、茎数は平年並～やや少なめ、葉色は平年並～やや淡めで推移しました。収量構成要素は、登熟歩合はやや低く、千粒重は平年並でしたが、穂数と一穂粒数(m²当たり粒数)が平年並～多かったため、収量は平年並～やや多くなりました。

病害虫の発生状況は、例年よりイネカメムシの発生が多く見られ、不稔粒の発生が目立つ圃場も一部で見られました。イネカメムシは基部斑点米を発生させる他、出穂期に基部に加害を受けると不稔粒を発生させるため、イネカメムシの発生に合わせた適期防除を実施しましょう。

表 管内定点ほ場(品種:コシヒカリ)の調査結果

地点	区分	出穂期(月/日)	成熟期(月/日)	稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/m ²)	一穂粒数(粒/穂)	m ² 当たり粒数(×100粒)	登熟歩合(%)	千粒重(g)	収量(kg/10a)
水戸市	R6	7/26	9/2	91	19.3	414	78	323	82	21.5	581
	平年比(%)	8/2	9/12	98	107	97	109	105	96	98	99
茨城県	R6	7/28	9/7	93	21.5	345	105	360	76	22.0	559
	平年比(%)	8/1	9/10	107	110	106	125	133	90	99	109



イネカメムシの成虫(農業研究所)



↑高温対策の詳細はこちら

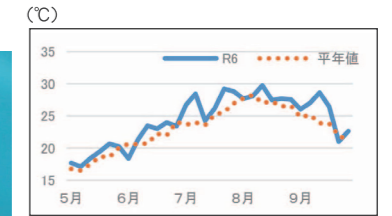


図1 R6平均気温の推移(水戸市)

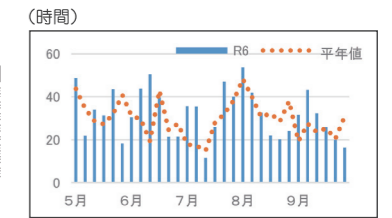


図2 R6日照時間の推移(水戸市)

有機農業現地検討会を開催しました

10月23日に有機農業の取組みを推進するため、水戸市内において「令和6年度有機農業現地検討会」を開催し、JA水戸有機農業研究会の農業者、関係機関等から38名が参加しました。



現地検討会の様子

当部門では有機農業の拡大に向け、令和6年1月に設立されたJA水戸有機農業研究会による野菜類の栽培実証を支援しています。

検討会ではJA水戸営農販売部よりJA水戸における有機農業の取組状況の説明、当部門から研究会の試験圃の報告を行いました。また、事例紹介として、研究会会長から、自身の経営概要と有機栽培の取組みの経緯についてお話いただいた後、有機JAS認証の圃場で野菜(かぶ)の栽培状況を見学しました。圃場見学では参加者から病害虫防除の方法、雑草対策、有機農業で課題となる管理方法等について活発に質問が挙がるなど、関心の高さがうかがえました。

当部門では、引き続き研究会の活動を支援し、有機農業の普及拡大に向けた取組みを推進します。

にら栽培省力化技術「セル成型育苗」

全国有数のにら産地である小美玉市では、多くのにら生産者が地床育苗による自家育苗を行っており、定植するときに苗床から採苗して選別した苗を1株4本程度に調整し半自動移植機で定植する等、定植作業に多くの時間を要しています。そのため、作業の省力化を目的に、他県で導入が進んでいるセル成型育苗を関係者で検討し、今年度、新たに2名の生産者がセル成型育苗を導入し、全体では4名の生産者が取り組んでいます。



歩行2条野菜移植機

具体的には、220穴のセルトレイに、1穴当たり4粒程度播種し、約3か月間雨よけハウスで育苗を行い、歩行2条野菜移植機(写真)で本圃に定植します。

使用した移植機は、苗箱をセットするだけで苗の押出しから植付けまで自動化でき、定植時間が従来の約5分の1と大幅に短縮されました。

セル成型育苗を導入した生産者は、定植作業の省力化を実感しており、今後も導入者は増える見込みです。

貯蔵期のサツマイモ基腐病の注意点について

サツマイモ基腐病は糸状菌(かび)によって引き起こされ、保菌したイモ・苗・残渣(葉や茎の残がい)等が伝染源となります。発生すると防除が難しく、被害が拡大する恐れがあるため、貯蔵期には以下の点に注意しましょう。

- サツマイモ基腐病に感染したイモは、なり首側からゆっくりと腐敗します。
- 収穫時に症状がない場合でも貯蔵中に腐敗することがあります。
- 疑わしい症状のイモを見つけた場合、当部門までご連絡ください。

茨城県では、サツマイモ基腐病については、特に発生を警戒すべき病害であることから、すべての農業者(家庭菜園を含む)の方々に守っていただくルール(遵守事項)を定めています。詳細はQRコードからホームページをご参照ください。



茨城県総合防除計画概要版